
真紅の魔眼と漆黒の剣

僕様ちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真紅の魔眼と漆黒の剣

【Nコード】

N5051W

【作者名】

僕様ちゃん

【あらすじ】

私が目を覚ますと、全身傷だらけの、一人の少年が居た。
その人は、私を心配していた。

なぜ？ 私はあなたを知らないのに。

なぜ？ あなたの方が傷だらけなのに。

そう言うと、彼は、

涙を流しながら、

ゴメン、ゴメンね、
と謝り出した。

彼がなぜ謝って居るのか分からない。

なのにどうして、私はこんなに心苦しいのだろう。
なのにどうして、私は泣いて居るのだろう。

〜プロローグ〜（前書き）

登場人物

主人公

無名の天才・斑鳩 誠

ヒロイン

歴代最悪の失敗作・ジル・ザ・リップパー

くプロローグ

ザワザワ・・・

「えーっと・・・ どこに行けば良いのかな・・・？」

私は今、ローマ武偵校の中を彷徨っていた。
今日は私達、新入生の入学式なのだけど、

「ううう・・・ 引率の先生とはぐれちゃったよう・・・」

私は見る物全てが珍しくて、
キョロキョロして居る間に皆とはぐれてしまった。

「ううう・・・ どうしよう・・・」

「ん？ そのあなた、何してんの？ もう直ぐ入学式始

まるぜ？」

「・・・え？」

突然上の方から、声がした

見上げて見ると、一人の少年が木に腰掛けて居た。

「あ、ああああの！！！！ その！！！！！！」

「・・・道に迷った？ それとも俺と同じでサボリか？」

「まままま、迷いました！！！！」

て言うかこの人、今サボりって言った!?

「校舎沿いに歩いてって、渡り廊下をまっすぐ行ったら着くよ」

「あ、ありがとうございます!!! それと・・・」

「ん?まだ何か用か?」

「・・・一緒に行きませんか?」

「はあ? 何だよ、めんどい」

「そこをなんとか!! 私まだ、いまいち道が分からないんで、道案内をお願いしたいんです!!!」

・・・嘘だ。

あんなに簡単な道が分からない筈が無い。

私はただ、目の前の少年が放って置けないのだ。

酷く虚ろで、寂しそうな目をした彼が。

「・・・分かったよ」

「本当ですか!?! ありがとうございます!?!」

そう言っただけ彼は木から降りて来て

二人連れ立って歩き出した。

「あつ! 自己紹介がまだでしたね。私、ジルって言いま

す。よろしくお願いします！：！「

「・・・斑鳩 誠。よろしく」

こうして私と、誠は出会った。

第一弾 無名の天才

始めまして皆さん

斑鳩 誠です。

名前負けして居るとよく言われます。

さて、このまま自己紹介を続けたいのですが・・・

バタンツ

「おはよーございますー!!! 誠君ー!!!」

はい来たー!!!

「おはようジル。毎朝言ってるけど、ドアを開ける時はインターホンかノックしてくれ」

「良いじゃ無いですか? この時間にはいつも起きてるんだし!」

まあ、そうなんだけどさあ。

何かこう、心の準備的なもんがさあ・・・

いや、もう良いや・・・

「ほら、行きましょう? 早くいかないと、遅刻しますよ?」

「この時間で遅刻したら、他の奴等は無断欠席扱いされるわー!」

俺達が寝坊した見たいな話し方して居るが、

いま、朝の5時だぜ!?

「ほらほらッ、行きましよう!?!」

「ああーはいはい」

「ハイは一回!! ですよ?」

そう言っつて俺達は部屋から出て、
通学路を並んで歩いて行く。

—————

誠君と始めて出会ったあの日から半年たった今、
私達はこうして一緒に登校している。

朝の早い私に、なんだかんだ言いながら、
合わせてくれるのがちよつと嬉しかった¥¥¥

入学して来て半年の間、誠くんは
いつも引っ込み思案な私に、気さくに声を掛けてくれた。

君は私にとって、初めての友達で、そして・・・

「ほらどうした? 行かないのか?」

「ああ!?!?! ーごめんなさーい!?!」

・・・そして君は、私にとっての、初恋の人。

――

ガラガラッ

．．．案の定、教室には誰も居なかった。

「．．．な？」

「ああー。やっぱり誰も居ないですねー」

「．．．何でニヤニヤしてんの？」

「えっ！？ ニヤニヤなんてしてないですよー」（棒読み）

「まあ良いけど．．．」

取り合えず荷物を置いて、
俺は教室を後にする。

「あ、今日も射撃訓練ですか？ 熱心ですね」

「まあ、定期的にやらねーと訛るからな」

「やれやれ．．．それで一体いくつ弾を無駄にするのやら．．．」

そう言っつて、明らかにがっかりしたように
肩を落とすジル。

一体なんなんだ．．．

「．．．今度コツを教えてくださいね？」

「分かってるよー」

—————

彼が教室を去った後、

私は大きいため息をついた。

「・・・はあーあ。言っちゃった・・・」

彼は入学してから、毎朝欠かさず射撃訓練を行っている。

・・・冒頭で、私は朝が早いと言いましたが、

実際は彼に合わせて起きる様になっただけなんです／＼／

だから私が行った時間に起きているのは、
ある意味当たり前なんですよね・・・

それで私も今まで何度か

「一緒に練習しても良いですか？」

と聞いたたら、

「絶対ダメ」

って言われました・・・

読者の皆さん・・・

やっぱり私、脈無しなんですかね・・・

—————

ダダダダダダッ

誰も居ない訓練所にニューナンプM60の銃声が鳴り響く。

「……………」

弾丸は全て同じ場所に命中していた。

「おおおお!!! ワン・ホール・ショットかよ!?!? さすが
が【無名の天才】だなあ?」

チャキッ

カラン、カラ、カラカラカラカラン!!

「【マッド・ハッター】か……………」

面倒くさいやつに遭遇した。

振り向くと道化のメイクに
大きなシルクハットを被った
身長2mの男が立っていた。

「おいおい!?!? そんな露骨に嫌そうな顔すんなよ? トモダ
チだろ?」

「黙れ。最近顔を見せないと思ったら、どこに行っていた」

「しょうが無いじゃ無いのお? 俺だって忙しいんだよ。それ
にしても……………」

「……………」

「俺が教えてやった【あの女】、半年も経って、まだ生きてるみたいだが……まさか、情でも移ったか？」

「……まさか？」

チツチツチツチツチツチツ
カシヤッ

「まあ、やるならやるで早くした方が良いで？」

「？ どう言う事だ？」

「他のクライアントの事だから、詳しくは言えないが……【ある貴族】が、【あの女】を狙っているらしい」

……何だと？

「その貴族ってのは？」

「んふ〜？ 興味あるかね、誠ちゃん？」

「良いからさっさと答えろ！……！」

チャキッ

「おお〜怖！！ そうだな、詳しく教えられないって言ったけど、ヒントなら良いだろう。何てったてトモダチなんだし……！」

ゲラゲラゲラ……！！

「・・・【M】だ」

「M？」

なんだ？

頭文字か？ コードネームか？

「そうだ、もしも来るなら、半年以内だろう。悪いが、俺が言えるのはここまでだ」

「・・・そうか。要件が済んだなら消えろ。で無いと、その眉間に鉛玉ブチ込むぞ」

「言われなくても消えるよ。ただ、最後にもう一つ」

「チッ！！まだあるのか？」

「もしもMと遭遇しても、戦おうとするな。逃げる」

「ー奴は・・・」

「奴は次元が違う。例えお前でも、戦えば殺され事になるぞ」

「・・・何で俺が、【あの女】の為に戦わなくちゃいけないんだよ？」

「・・・そうだったな。お前にとって【あの女】は親父さんの、仇の娘でしか無いもんさ」

「……………」

「用件はそんだけだ。んじゃな!!!!」

…チャキツ!! ダンツ!!

弾丸は的から大き逸れ、壁に命中していた。

俺は、親父の形見の銃を

血が滲むほど握り締めていた。

「…親父の、仇…」

俺は一体、

どうしたら良いんだろうな？

なあ、ジル…

第二弾 歴代最悪の失敗作

「ーそれじゃあ行つて来る。留守は任せたぞ、誠」

「うん、分かつてるよ父さん。気を付けてね」

．．行かないで父さん。

行けばきつと父さんは．．

帰つて来れないから。

父さんに伸ばした手は
虚しく空を切った。

――

――

――

「．．誠くん？誠くんッ」

「ああ悪い．．俺寝てたか？」

そう言つて体を起こす

「三時間ぶつ通しで．．．ってあれ？」

「ん？どうかしたのか？」

ジルが怪訝な顔をして覗き込んで来る。

「・・・あの、えと、どうして、泣いてるんですか？」

「・・・ああ」

何だ俺泣いてたのか・・・

「ちょっと、昔の夢を見ていたみたいだ」

「ええー。それってどんな夢だったんですか？
めて失恋した時の夢とかですか！？」

もしかして始

そう言っつてニヤニヤしながらハラハラすると言っ、
意味も無く高等な事やってのけていた。

「親父が死んだ時の夢だ」

「あ・・・」

そう言っつて、申し訳なさそうな顔をするジル。

「別に気にするなよ。お前が所為じゃ無いんだし」

「それでも、無神経な事を聞いてしまっつてしまいました・・・ごめ
んなさい・・・」

シヨポーン・・・

と音が聞こえるほど落ち込んでいる・・・

「・・・俺の親父はさ、殺されたんだよ」

「え？」

俺は何故か、そんな事を口走っていた。

やめる．．．

こんな話したく無い．．．

「ある殺人鬼を追いかけている時に、返り討ちにあってさ．．．」

やめる！！

これ以上ジルにこの話をするな！！

だが俺の口は止まらない

「俺の唯一の肉親を殺した、その殺人鬼が、許せなかったんだ．．．

だから俺は武偵になった。その殺人鬼を捕まえて、親父の仇を打つ為に．．．」

「．．．そう、だったんですか．．．」

．．．そして、その殺人鬼の名前は、【ジャック・ザ・リップー三世】

ジルの実の父親なんだ。

そう口にしそうになった時。

「おーい！！！！お二人さん、なに辛気臭えく話してんだよ！？」

「うわぁ！！！！ ティナさん！？」

「そうですね、二人とも　折角のお昼休みなんですから、ご飯を食べましょう?」

「ようメアリー。もうそんな時間なのか?」

ジルの友人である、
ティナとメアリーが声を掛けて来た。

．．．何で俺はこんな話をしたんだろう。

昔の夢を見て、少し感情的になってたかな．．．

そうして、誰にも聞こえない様な、
自重的なため息を付いた。

「オツケー。んじゃどうする?　食堂行くか?」

「さんせ〜!!!」

「そうですね〜」

「それじゃあ行きましょう?」

俺達は食堂に向けて歩いて行く。

そして俺は、

こんな日常が、ずっと続けば良いのにと、
心の底から思った。

その願いが、決して叶わないと知りながら．．．

話は半年前に遡る。

俺は復讐の為に、ローマ武偵校に入学する事になった。
だが、復讐の相手は

【ジャック・ザ・リッパー三世】本人ではなく。
その実の娘を先に始末する事にした。

理由は単純で、

俺と同じ、大切な物を失う苦しみを味合わせる為だった。

だが・・・

入学式で彼女に出会ってから数ヶ月経った頃、
彼女の事を調べている時に
ある事実を知った。

【歴代最悪の失敗作】

それが彼女の、家の中での呼ばれ方だった。

彼女は一族の者なら誰もが所有する、
殺人衝動と、驚異的な身体能力を、一切持たずに生まれて来た。

そんな彼女が、家庭で受けて来た扱いに、
俺は、額然とした。

彼女は、優れた子孫を残す為の道具として扱われていた。

・そんな彼女は、
・一体彼女は、どんな思いをしながら笑っているだろうか。

本当に心の底から笑えているのだろうか。

そう考え出した時にはもう、

彼女に対する殺意は霧散して行つた。

そして俺は、せめて学校にいている間は、

心の底から笑顔で居させてあげたいと思つた。

出会つてから数ヶ月、

俺は殺す筈だつた彼女の事を、好きになつた。

――

――ある大きな屋敷の、しんと静まり返つた一部屋に

シルクハットを被つた長身の男と

燕尾服を着た青年の姿があつた。

「――今回の情報はそんだけだ」

「そうか、ご苦労。また進展があり次第、報告しろ」

そう言つて青年は、静かに椅子に腰を下ろした

「分かつてますよ、【ジエームス・モリアーティ4世】様？

それにしても、分かりませんねえ。どうしてあんな程のイケメン

が、あんなどこにでも居そつな女に固執するんですかい？」

「．．．それは、貴様には関係ない話だ」

「まあ。それもそつすね」

長身の男は、ドアに向かって去って行った。

「．．．．．」

その後を青年は、無言で見つめていた。

――

――

――

屋敷から少し離れた場所で、

長身の男は噛み殺した笑いを溢していた。

「．．．さあゝて、誠。お手並み拝見と行かせてもらつぜ？」

それにしても．．．

「あれが本当に16歳に出せる殺気かねえ。誠も大概だが、やつぱりあいつは格が違うなあ」

．．．男の影はそのまま闇に吞まれて見えなくなった．．．

「精々死なねえ様に頑張れよ、誠？　俺はこつ見えて、お前の事が気に入ってんだから」

第二弾 歴代最悪の失敗作（後書き）

やっちゃんいましたね。

モリアーティ出しちゃいましたよ・・・

絶対本作で出るから使うのにちょっと抵抗があったんですが。

第三弾 平穏な日常（前書き）

イヤ〜久しぶりに書きましたよ。

何かグダってないか心配です・・・

第三弾 平穏な日常

それから暫く、俺たちはありきたりな毎日を送っていた。毎日同じ時間に登校し、何度か射撃の練習にも付き合わせる様になった。

(壊滅的に下手だった)

その後教室に戻ると、

すでに登校していた他の生徒達にひやかせる。

そして授業を受け、昼飯を食い、単位の為に依頼をこなす。

どうしようも無くありきたりで、

どうしようも無く幸せな日々・・・

そんな生活が数ヶ月続いたある日、

俺はある一代決心をした!!!

「・・・な、なあジル？」

「モフモフ・・・なんれふか？」

ジルは、手作りのサンドイッチをほうばっていた。

何だか間抜けだが、今が絶好のチャンス!!!

時間は昼時、場所は中庭、周囲を見回しても人影無し！
よし!!!

「・・・今度の休み、一緒にどっか出かけないか？」

「・・・ふえ？」

ジルの動きが止まった。

「ふええええ！？　　そそそそれって2人つきりですか！？」

「ま、まあ俺もお前も、そこまで仲の良い友達いないしな」

「じじじじじゃあ！それって、デデデデートって事ですよね！？」

「・・・まあそうなるかな？」

「・・・うわあああ！！！！」

「恥ずい！！！！
これは恥ずい！！！！」

「ああああの！！　　ええとだな！？　　もし他に用事がある
なら、無理して来なくても良いんだぞ！？」

「行きますッ！！！！　　絶対行きます！！！！　　例えどんな
用事があるうと、例え交通事故にあって身体中の骨が折れても、這
つてでも向かいます！！！！」

「病院に行け！！！！」

何はともあれ、OKは貰え、第一関門は突破した。

後は、休みの日までに完璧なデートプランを考えるのみ！！！！

そして俺は、

彼女に．．．

――・――

その日の授業を終えて、私は寮の自室に帰っ「きゃー――！！！！」
「」

デート！！！！

デートですよ皆さん！！！！

「私にも遂に、遂に春が来ました！！！！」 「当日は何を着て行きま
しょう、清楚系かな？可愛い系かな？ラフなのが良いか？それと
も意表をつけてゴスロリ！？まさか誠君にな趣味が．．．」 「ああ、
デートの終わりに告白されたらどうしよう？『ジル、俺はずっと君
の事がずっと．．．』なんて．．．」 「イヤンダメです誠さん、こ
んな所で．．．ぐふ、ぐふふふ」

コンコンっ

「はっ！？ 私は今、何を考えて．．．」

突然のノックで意識を取り戻した。

（もうちょっと！！ もうちょっとだったのに！！）

コンコンっ

「あ、はい今開けます」

ガチャ

扉を開けると、呆れた顔の寮母さんが立っていた。

「・・・妄想にドップリ浸かるのは良いけど、もうちょっと静かにしなさい。隣室の子が『ジルが悪霊に取り憑かれた、エクソシストを呼んでくれ』て泣きついて来たわよ?」

「・・・す、すみません／＼」

・・・そんな大声出してたんだ、私／＼

「それで?」

「ふえ?　それでって何がですか?」

「『何が』じゃ無くて、デート何でしょ?」

「ふええええ!?!　そんな事まで聴こえてたんですか!?!」

「ええ、服がどうか、告白されたらどうしようとか」

きゃーーーーー!!! (恥)

「それはさておき、ジルはデート初めて?」

「うう・・・ハイ。だからどんな服を来て行ったら良いのか、どんな風に話したら良いのか、分からなくて・・・」

もうイヤだ・・・

穴があつたら入りたい・・・

「・・・だったらおばさんが、必殺のデートテクニックを伝授してあげようか?」

「ええ!?!? 本当ですか!?!?」

「もちろん! 可愛い女の子の為に、おばさん一肌脱いじゃうよ!」

これは・・・
まさに渡りに船!!!!

「それじゃあお願いします!! おばさん!!
生!!!!」

いえ、先

そしておばさんとのデート講座は深夜2時まで続いた。

・・・明日起きれるかなあ・・・

デートに誘ったあの日から、時間はあっという間にすぎ、
デート当日

待ち合わせ場所に向かいながら、俺は腕時計を確認した。
待ち合わせ時間は【10時】
腕時計は【3時半】を指していた。

「っ!?!? ば、馬鹿な!?!?」

・・・よく見ると腕時計が上・下逆に付けてあった。

本当に馬鹿じゃん

付け直してから、再度確認すると、時間は【9時】を指していた。

「・・・ははっ 一時間も早く着いちゃった」

そう呟いて自重的に笑った。

（まあ良いさ、ジルが来るまで時間はある。ゆっくり時間を潰しながら、今日の予定を確認するか・・・）

そんな事を考えながら歩き続け、待ち合わせ場所に辿り着くと、

ジルがいた。

「・・・」

「あ、おはようございます!! 誠君」

「あ、ああおはよう。随分と早かったんだな・・・」

「そうですか? 私今から更に二時間前に着いたんですけど?」

「もっと馬鹿がいた!??」

するとジルが口元を押さえながら、クスクスと笑っていた。

「冗談ですよ。私もちょうど、今着いた所です。やっぱり私たちが気

が合いますね」

そう言つてジルは、微笑んだ。

俺はそんなジルの表情に見惚れてしまった。

「誠君？　　どうかしましたか？」

「いや、　何でも無いよ？」

そして俺は、照れ隠しのつもりで、ジルに笑い返した。

ジルは顔を真っ赤にしながら

「そ、そうですか！！」
と言った。

自分の顔は見えないけど、きっと俺の顔も、ジルと同じように真っ赤なんだろうな。

「それじゃあ行くところか？」

俺は彼女に右手をさし出した。

ジルそれを、照れながら、だけどしっかりと、握り返してくれた。

――

――

――

「ん〜！！！！」

今日は楽しかったですね」

「そうだな」

俺たちはあの後、映画館に行ったり、ウィンドウショッピングをしたして、いろんな所を見て回った。

「・・・また、今日見たいなデートができれば良いですね」

「ああ・・・」

俺たちが今居るのは、ローマの夜景が一望できる展望公園。

俺がデートの締めを選んだ場所だ。

普段はカップルの多いこの場所でも、今の季節のせいかな誰一人として居ない。

「・・・きれい、ですね」

・・・ジルがそう呟いた。

そして俺は・・・

「なあジル、実は俺」

「誠君は、私の事、どう思いますか？」

ジルが俺の話の遮って話し出した。

「・・・え？」

――

「．．．え？」

誠君が、とても困惑した様な顔をして居る。
だけど私は止まらない。

「私は、誠君の事が大好きです」

私は今まで溜まっていた思いを、彼に向かってブチまけていく。

「人と話すのが苦手だった私に、気さくに話し掛けてくれた君が、」

「私の、初めての友達になってくれた君が、」

「1人じゃ何もできない私の為に、たくさんの依頼を手伝ってくれた君が、」

「いろんな悩みを聞いてくれた君が、」

私は、

「世界で一番、大好きです」

ねえ誠君？

「誠君は私の事どう思ってますか？」

誠君は最初はとても驚いていたけど、
途中から、静かに私の話を聞いていた。

「．．．何だ、結局．．．．．だったのか．．．」

「え？」

「ジル、俺はさ、ジルの笑顔が好きなんだ」

だから・・・

「これからもずっと、ジルの近くで、ジルの笑顔を見ていたい」

そう言って、

今まで聞いた事が無い程優しい声で・・・

「大好きだ、ジル。」

これからもずっと、お前の事を守るから。

こんな俺でよかったら、俺も恋人になつて欲しい・・・」

「・・・はいつ!!!」

私は彼に抱きついて、

その拍子に2人で地面倒れこんだ。

「いたたた・・・」

「えへへへ」

「何で笑ってんだよ。人を押し倒しておいて」

「誠君？」

「何だ？」

「大好きです」

チュッ

—————

それから暫くして、俺たちは、武偵校の女子寮の前まで戻って来ていた。

「ここまで送ってくれて、ありがとうございます!!」

「良いよ別に、ただ俺がジルから離れたく無かったただだから」

「えへへへ／＼／＼」

そう言つて顔を赤くする。

めっっちゃ可愛い。

「それじゃあおやすみ。また明日」

「あ、待ってください!!」

たっ たっ たっ たっ

チュッ

「おやすみのキスです」

それじゃあおやすみなさい」

たっ たっ たっ たっ

そう言って帰って行った。
めっちゃくちゃ可愛い。

そして俺も、寮に向かって歩き始めた。

「それで？　　家まで着いて来るつもりか？」

「・・・へえ？　　気付いてたのか？」

俺の背後の闇の帳から、そんな声が聴こえて来た。

「まあな、尾け出して来たのは映画館を出た辺りからか？」

「正解だ」

コツコツコツ

そして闇の中から、

燕尾服を着た青年が現れた。

そして優雅に礼をし顔を上げた。

「始めまして、だな。私はジェームズ・モリアーティ四世と言つ者だ。マッドハッターに聞いてないかな？」

モリアーティ・・・

『M』、か。

「それで？　　俺になんか用か？　　今日は疲れたから、早く帰って寝たいんだけど」

「そうか、それは済まない。大した用じゃ無いんだ」

ただ・・・

「ジル・ザ・リッパーを引き取りに来ただけだよ」

「引き取りに来た？ おいおい、それじゃあまるでお前が身内
みたいな言い方だな？」

するとモリアーティは、

「ふむ・・・」

と一拍おいて、

「身内では無く、私は『アレ』の『所有者』だ」

「『所有者』？ どういう意味だ？」

・・・本当はこんな事を聞く意味なんて無い。

こいつの言ってる意味が、俺にはどうしようも無く分かってしまう。

「どういう意味って？」

言った通りだ、私は『アレ』の『所有権』をリッパー家から、金を
払って買い取っただけだ」

「もういい黙れ」

俺は静かに、

懐から銃を取り出した。

「・・・手前が、二度と彼女に近づかないって誓うなら見逃してやる・・・それができ無いつてんなら、手前を殺す」

「・・・できると思ってるのかい？」

さあな・・・

少なくとも、

お前は俺より強いだろう。

戦えば、俺は負けるか、最悪の場合殺されかねない。

だけど・・・

「自分の女が奪われるって分かってて、それを黙って見てる訳にはいかんだろ」

第四弾 開幕（前書き）

長ったらしく書いてしまいました・・・

グダッて無いか心配です (^| ^;))

第四弾 開幕

「ふんふん？」

キヤーー！！！！

私ついに、誠君の彼女になれたんだ！！

「明日からどうしよう？」

毎朝一緒に、腕を組んで登校とか？」

そんな事考えながら、

寝室に踊りながら向かう。

そして、

くるくるくる～

ボスンッ

と、ベットに倒れこんだ。

「はふう……」

(私、こんなに幸せで良いのかな……)

「……ねえ誠君」

私はここには居ない、最愛の人の名前を呼んだ。

「……私、幸せ過ぎて、辛いよ……」

さっきから、胸がづるさくらい高鳴っていて、

とてもじゃ無いけど、眠れそうにない。

ベッドの上で悶々としてしていると、気が付けば時計は、深夜の1時を指していた。

「うわぁ・・・

もうこんな時間何だ・・・

早く寝なきや」

そう言っつて寝室を出て、浴室に向かおうとした時、

ぽつ、ポツポツ、

さぁぁぁー

「・・・あれ？」

突然、雨が降り出した。

「何でだろう・・・

朝はあんなに天気良かったのに」

・・・胸の高鳴りは、

いつしか喜びからくる物ではなく、不安から来る物に変わっていた。

（・・・どうしてこんな気持ちになるのかな？

そっだ、誠君に相談しよう）

深夜の1時に電話をかけるなんて、非常識も良い所だけど、彼は私と一緒に、きつと眠って居ないという確信があった。

携帯を取り出し、
何度も掛けた彼の番号を押そうとした。

だけどうまく行かない・・・

「なんで、どうして!?!」

そんな事、声に出さなくても分かっていた。

・・・携帯を持つ指が、震えていたから。

震えは指から腕、腕から全身に広がって行った。

(・・・誠君、誠君!!!)

やっとの思いで番号を入力し終えて、携帯を耳に当てた。

・・・だけど、何度コールしても、彼はでない。

たとえ寝ていたとしても、これだけコールすれば起きる筈だ・・・

そこで私は、ようやく不安の理由が分かった。

理解した時には、私は部屋を飛び出して行った。

—————

ダダン!!!!!

ダダダダン!!!!!

「・・・ふん」

モリアーティが、俺の放った銃弾と全く同じ軌道、タイミングで銃弾を放ち、空中で『銃弾』を撃ち落とす。

さつきから何度も繰り返して居る光景だった。

「ハアツハアツ!!!」

「・・・良い加減に諦める。

貴様では私には勝てない」

「ッ!!! 黙れっ!!!」

だが、いくら凄んだ所で、俺に勝ち目が無いのは明白だった。

左腕は撃ち抜かれ、使い物にならない。

右太腿の中には、貫通し無かった銃弾が今だに残っている。

機動力も、戦力も、テクニクも、全てにおいて絶望的な迄の差があった。

「ー貴様は良くやったよ。

私相手にここまで持った奴は初めてだ。

誇りに思っって良い」

だが、

「そろそろ決着を付けよう。

ここまで戦った貴様に敬意を評し、我がモリアーティ家の家宝で殺

してやる」

シュリィィン—

モリアーティは腰から下げていた鞘から、
一本のサーベルを引き抜いた。

その刀身は闇夜に溶けて、
消えてしまいそうな程に、
黒かった。

「．．．ハッ

やれるもんならやって見な—！」

俺も拳銃を懐にしまい、代わりにコンバットナイフを取り出した。

「—行くぞ—！」

「うおおおお—！」

そして二つの影が交差した。

—————

「ハアッハアッ—！」

私は走っていた。
彼を探して。

一縷の望みを託して行った寮にも、彼の姿は無かった。

それからの私は、
ただ闇雲に、心当たりのある場所を虱潰しにしていた。

「ッハアツ!!!
ハアツ!!!」

肺が痛い
心臓が痛い
足が痛い
全身汗塗れだ

だけど...

「ッ!!
まこと、くん!!」

今彼を見つけ無いと、大変な事になってしまう。

そう考えると、
そこを着いた筈の体に力がもどって来る。

「ー待っててね...誠君。
今、助けに行くから...」

はっきり言って、

彼の元に駆けつけても、私にできる事なんてないかもしれない。

それでも...

――
――

――

たん、たたたん・・・

と、学校の近くにさし向かった辺りで、そんな音が聞こえた。

(今は・・・銃声!?)

私は銃声の聞こえた方向に向かって駆け出した。

――

・・・ドサッ

俺は地面に倒れ伏せた。

どうやら身体中切り刻まれたようだ・・・
そんな事確認するまでも無い。

身体がまるで、他人の物でもあるかのように、指一つ動かない・・・

それと、視界も極端に狭くなった。
と言つより、

右目が見えない

「ふん、まだ生きているのか。
存外しぶといな」

「・・・ゴホッ・・・」

まあ、な。

それだけが、取り柄、見たいなもんだからな．．．」

ああだめだ．．．

意識が遠のく．．．

「――貴様には悪いと思うが、あれは私の『物』だ。貴様に『アレ』を殺される訳には行かないんでな」

．．．何だつて？

『殺される訳には行かない』？

一体、誰が．．．

「『アレ』は貴様の復讐対象なのだろう？

貴様の父親を殺した、『ジャック・ザ・リツパー三世』の娘。

貴様は『アレ』を殺す為にこの学校に来たんだろう？」

「――」

．．．クソッ

反論したいのに声がでない．．．

いや、

そもそも反論なんてできないじゃ無いか。

あいつの言ってる事は全て真実だ。

ただ、

途中で、彼女に対する気持ちが変わっただけで、俺は確かに彼女を

殺すつもりだった・・・

「ーこれは・・・

何かの罰なのかなあ・・・」

愛する人を、騙し続けて来た俺への・・・

だとしても神様、

彼女は何も悪く無いだろ・・・

だから・・・

もしも神様がいるっていうなら・・・

あいつだけは、幸せにしてやってくれよ・・・

「・・・最後に何か、言い残す事はあるか？」

・・・言い残す事・・・

そんなの多過ぎて、

とてもじゃ無いけど言い切れない。

だけど、やっぱり・・・

これだけは言っておきやなきゃ・・・

「・・・ゴメンな、ジル・・・

お前を守るって約束、守れなかった・・・

ゴメンな・・・」

「.....」

チャキ

ダン!!

—————

ダダダダン!!!!!!

「ハアハア!!」

コツチかな!!!!」

ダンダンダン!!!!

徐々に銃声の数が減ってきた!!

(急がないと!! 誠君、無事でいて!!)

——

——

——

そして中庭の近くで不意に声が聞こえた。

「貴様は——」

(!?!? コツチだ!!!)

私は中庭に向かって走り出した。

そして・・・

「父親の仇である『ジャック・ザ・リッパ―三世』の娘を殺す為にこの学校に来たんだらう？」

・・・えっ？

・・・今、なんて言ったの・・・？

『チチオヤノカタキ』？

『ジャック・ザ・リッパ―サンセイ』？

『ムスメヲコロス』？

「え・・・嘘・・・そんな・・・」

「――最後に何か、言い残す事はあるか？」

そう言って、見知らぬ青年は、
彼に向かって銃口を向けた。

（私の、父さんが、誠君の父さんを、殺した？）

そして・・・

「誠君は・・・私を殺す為に・・・この学校に・・・来た？」

そんな事が、

頭の中でぐるぐる繰り返されていた時・・・

「――ゴメンな、ジル・・・」

お前を守るって約束、
守れなかった・・・

ゴメンな・・・」

――確かに、

はつきりと、誠君の声が聴こえた。

「……………」

チャキ・・・

青年が引鉄に指を掛け、そして――

私は誠君に向かって駆け出した。

疲れなんて感じない
肺も心臓も痛くない
きつと人生の中で、今が一番速く走れている

だから！！！！

間に合って！！！！

「だめええええええええええ！！！！！！」

そして銃声が響き渡った・・・

――！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

「．．．え？」

地面に伏せる

俺の目の前に

ジルが立っていた

「．．．どうして．．．」

ジルが、ここに居る

「あ、誠君」

そう言って振り向いたジルの顔は、

笑っていた．．．

「．．．よかったあ．．．」

わたし、まことくんのことを、守れたんですね

彼女は腹から血を流しながら、
とても嬉しそうにそう言った。

「わたし、今までまことくんに、
助けてもらってばかりだったから、
迷惑かけて、ばっかりだったから．．．
初めて．．．

まことくんの役に立てかな？

．．．ゴホッゴホッ」

そんな・・・

嘘だ

嘘だ！！！！！！

ジルが、そんな・・・

そんなのって・・・

あつてたまるか！！！！

「あれ・・・？」

不意に、ジルの体が傾き、そのまま倒れて行く

俺は必死に状態を起こし、ジルを受け止めた・・・

「・・・大丈夫か！！！！　　ジル！！！！」

「・・・ありがとう・・・誠君。

あはは、私どうしちゃったのかな？

急に倒れちゃうなんて・・・

貧血かなあ？」

てへへ・・・

「・・・ねえ・・・

まことくん・・・」

「・・・ああ、何だ？」

俺は涙を堪えながら、そう言うのが精一杯だった。

「わたし、さっきの話聞いちゃいました」

「・・・ッ!!　　そうか・・・」

話とは、

きつとあの事だろう・・・

「・・・ねえ誠君・・・」

それでも私は、君の事を好きでいて良いですか？

たとえ誠君が、

わたしの事を憎んでいてもー」

「そんな分けないだろッ!!!!!」

俺は、

我慢できずに大声で怒鳴った。

「お前の事を、ジルの事を、

俺が恨んだりする訳無いだろう・・・?」

そう言い終えると、

ジルは優しく微笑んで、俺の頬に手を添えた。

「・・・そうですね・・・」

ゴメンなさい、こんな事聞いちゃって・・・

だから、誠君・・・

泣か無いでください。

私、今とっても幸せなんですから・・・

やっと、誠君の役に立てたのが、嬉しくて嬉しくて・・・

だから誠君は・・・

笑って下さい

お願い、します」

ジルは、顔を蒼白にしながら、
そう、懇願して来た。

それは、彼女が、俺に初めてした『お願い』だったから・・・

「・・・分かったよ・・・

こんな状態で笑えなんて、

無茶振にも程がある・・・」

・・・俺は、彼女の言う通り、
無理やり笑って見せた・・・

「ーほら、これで良いか？」

きつと俺の顔は、

いま、ひどく不恰好だろう。

右目は切り裂かれ、

涙を流しながら、

悲しみを堪えて・・・

それでもジルは・・・

「ありがとうございます．．．
あと、わたし

ちょっと疲れちゃったので、チヨットだけ．．．
寝かせて下さい．．．」

「ああ．．．明日の朝は、俺が起こしに行くから．．．
一緒に腕組んで登校しよう．．．」

「あはは．．．奇遇ですね、わたしも同じ事考えてたんですよ？」

「そっか．．．」

「やっぱり俺たち、相性良いんだな．．．」

「ねえ．．．誠君．．．」

「ん？」

「．．．おやすみのキス．．．して下さい．．．」

「はは、今日は随分『お願い』が多いな．．．」

「ダメ、ですか？」

「良いよ、それくらい．．．」

チュッ

それは触れ合うだけの、
優しいキスだった

「・・・おやすみ、ジル」

「・・・おやすみなさい、誠君」

そして俺は、

彼女の体をそつと地面に下ろした・・・

――

――

――

「――マッドハッター!!!!!!」

居るんだろぅが!!!!!!

この、覗き見趣味の変態野郎!!!!!!!!」

俺は、学校全体に響き渡るほどの大声で怒鳴った。

すると背後の闇の中から、
ツカツカツカツカ・・・

と言う音が聴こえて来た。

「・・・はあゝああ

やらやれ、あれ程戦ったのに、喧嘩売っちゃって・・・
お前はアホか!?!」

「その話はどうでも良い・・・

彼女を近くの病院まで連れて行ってくれ」

「私からも頼む。

『ソレ』死なれると困るからな」

遠くで木にもたれ掛かっていたモリアーティも、加勢して来た。

「・・・ああはいはい分かりましたよ！！！！
連れて来やいいんだろ！？」

そしてマッドハッターは、ジルを片手で引っ掴んで闇の中に消えて行った。

「・・・さてと、仕切り直した・・・」

「ああ、今度こそ殺してやるう」

俺は弾倉に、
『最後の一発』
を込める。

親父の、もう一つの形見。
漆黒の『武偵弾』

チャキン
弾倉を出し、
カチャ
弾を込め
カシンツ！！！！
銃身に叩き込む！！！！

そして俺たちは、互いに銃口を突きつける。

そんな時、

．．．もうやめる。

．．．俺の中で、ひどく理性的な声が聞こえる。

．．．彼女は助かったんだ。もう良いだろう？

（確かにそうだ．．．）

．．．こんな化け物相手に、勝てる訳無い。

（全くだ．．．）

．．．じゃあどうして戦うんだ。

（さあな、わかんねえ）

．．．これ以上戦えば、死んじまうぞ。

（そうかもな、だけどー！！）

「自分の愛した女が奪われるくらいなら！！
死んだ方がマシなんだよ！！！」

ゾワッ

その瞬間、俺の中で何かが切り替わって行く。

全身の痛みが消え、

視界がクリアになって行く、
切り裂かれた右目から見える風景は、
全てが紅で、それでいて美しい世界だった。

「……………」

「……………」

「

――

――

ダン！！

先にモリアーティが引鉄を引いた。
が、いまの俺には関係ない。

俺にはモリアーティの放った銃弾が、止まって見えた。

あとはその軌道上に銃口を向けて、
引鉄を引くだけ。

ガウン！！！！

銃口から漆黒の武偵弾が撃ち出され、
親父の銃が粉々に砕け散った。

「なっ！？」

バキーン！！！！

武偵弾はモリアーティの放った銃弾を弾き、
勢いを殺さぬままモリアーティの銃に命中し、奴の武器を破壊した。

「くそっ!!」

「.....」

これでお互い肉弾戦しか無くなった。

さっきは勝てなかった、

だが、いまの俺は誰にも負けない!!!

「行くぞ」

「つく!?」

俺は一足で奴の間合いまで潜り込んで、

その腹を思いつ切り殴りつけた!!

ペキペキペキ!!!

「ッ!!!!!!」
「がぁ!!!!!!」

とっさに距離を取り、か剣を引き抜くが、

「遅い」

俺の拳が奴の顔面を捉えた!!

「つくそおお!!!!!!」

それを状態を無理矢理捻って回避した。

空を切った俺の拳が、奴の後ろの木をへし折った。

「つく!! 化物め!!!!」

モリアーティが剣で斬りかかって来る。

(なるほど、これは速いな)

俺の視界にはその剣が、

『ゆっくり振り下ろされて居る』
ように見えた。

「.....」

パシ

「.....は?」

俺はその剣を、二本の指で挟んで止めた。

「ふ、ふざけるなッ!!!!!!」

こんな事できる訳がー」

「黙れ」

ぐキヤ

「がっ!？」

ドサッ・・・

「・・・終わった、か・・・」

そう思った瞬間、俺の体から力が抜け、
その場に倒れこんだ・・・

(ははは・・・いくら気が抜けたからって、その場に倒れるって・・・)

そう思って地面に手をつこうとすると、

(・・・あれ?)

指一本動かなかった・・・

そして急に猛烈な睡魔に襲われた。

(あ、これは、ヤバイ、なあ・・・)

――そうして

――俺の意識は

――闇に沈んで行った。

第五弾 さよなら（前書き）

前回の補足として

最後に誠は、魔眼と『死に際のヒステリアモード』と『ベルゼ』を同時に発動しました。

今後あんな展開はまあ無いと思います。

だって強すぎるし。

第五弾 さよなら

『チュンチュンッ』

「・・・あ」

・・・目を開くと、見慣れない真っ白な天井が広がっていた。

（・・・と言うと、ここは病院か・・・俺、生きてたのか・・・）

そんな事をぼんやり考えていると、

「よう。目が覚めたか？」

不意に隣から聞き慣れた声が聴こえた。

横になったまま、顔を横に向けると、

いつもと同じ格好のマッドハッターがいた。

「よう変態・・・」

起き明けにお前の顔を見る羽目になるなんてな、最悪の気分だ・・・

「・・・言ってる」

・・・なんだ？

こいつのリアクションが、いつもと比べてとても低い・・・

そう言えば・・・

ジルは!?

ジルはどうなったんだ!?

「・・・まさか、ジルに何かあったのか!？」

「・・・いや・・・生きてはいる、だが・・・」

落ち着いて聞いてくれよ?

と前置きを置いてから、ジルのいま置かれている状態について話し出した・・・

――

――

――

「――ハアツハアツ!！」

――俺は病院の中を駆けていた・・・

身体中が、引き千切れそうなくらい痛い・・・

だけど・・・

ガラッ!!!

「ジルッ!!!!!」

――駆け込んだ病院の一室で、ジルがベットの上で横になっていた・・・

病室にはティナとメアリーがいたが、
そんな事は関係無い。
今はどうしても、聞かなきゃいけない事がある。

．．．俺は息を整え、

「ーなあ．．．ジル．．．

『俺が誰か』か、分かるか．．．?」

俺は一縷の望みを託して、
声を震わせながら、そう聞いた．．．

「ーゴメンなさい。

『貴方は』誰ですか？

もし良ければ、お名前を教えてくださいても良いですか？」

．．．そう言われた瞬間、俺の頭の中は、真っ白になった。

「．．．えーっとね、

こいつは『斑鳩 誠』って言って、学校じゃジルの『友達』だった
んだけど．．．

やっぱり覚えて無いか．．．」

そう、ティナが説明しているのが、随分と遠くに聴こえた．．．

「あ？ そうだったんですか!？」

どうも始めまして!!

私、ジル・ザ・リップーって言います!!

あれ？

でも初対面じゃ無いんですよね？

じゃあ始めましてじゃおかしいですね」

てへへへ．．．

そう言っつてジルは、

いつもと変わらない笑みをこぼした．．．

俺は俯いて、

ずっと堪えていた。

怒りを

悲しみを

理不尽さを

ただただ、唇を噛み、拳を握って．．．

「これから何かと、ご迷惑をお掛けすると思いますが、
よろしく願いますね！！

『斑鳩君』！！！！

あれ？ 斑鳩君？」

ジルが俺に話しかけて来た．．．

何か、なんでも良いから答え無いと．．．

俺は顔を上げて、

「．．．ああ、そうだな．．．

よろしく．．．」

「・・・え？」

「おい、マロト？」

「誠さん？」

・・・何だよ、なんで皆してこっち見てるんだよ・・・

「あ、あの・・・」

と、ジルがオドオドしながら、

「・・・ゴメンなさい

私、何か失礼な事言っちゃいましたか・・・？」

「・・・いや、そんな事無いよ？」

「ーじゃあ、どうして、泣いてるんですか？」

「・・・」

ああ、なんだ、

俺、全然我慢できてねえじゃん・・・

・・・だったらもう、

我慢しなくて良いか・・・

「・・・ゴメン、な・・・」

守ってやれなくて。

「．．．ゴメン．．．」
ずっと、嘘をついていて。

「．．．ゴメンな．．．ゴメン．．．俺が．．．お前を．．．」

．．．後はもう、声にはならなかった。

―――

――

――

――

．．．私はベットの上で目を覚ました。

周りを見渡すと、二人の女性が立って居て、
私が目を覚ますと、二人はとても喜んでいた。

ここは何処なんだろう、
この人たちは誰なんだろう、

私の記憶は、武偵高の入学式の日の朝から、途切れている。

そして私は、
途切れ途切れの声で、

「貴方たちは、誰ですか．．．？」
と聞いた。

—
—
—

どうやら私は、一時的な記憶喪失になっているらしく、

暫く私は、

私は二人に色々な事を教えて貰った。

本当は、もう入学式から半年以上立っているとか、
二人は私の友達なのだから、

『四人』でたくさんのお頼をこなしてきたとか、

．．．二人はとても明るく話していたけど、
何処か辛そうで、悲しそうだった。

（当たり前だよな、友達に忘れられて、辛いに決まってるよね．．．
）

．．．それから毎日二人は私の病室に訪れてくれた。

今日の学校の話、

面白かった出来事、

楽しかった思いで、

毎日たくさんのお話を話してくれた。

そしていつも帰り際に、

「早く『二人とも』退院できたら良いね」

と言って帰って行く。

「．．．私の他にも、誰か友達が入院してるのかな．．．？」

そんな事を考えると、

胸の奥が、チクツと痛んだ．．．

「あれ？」

そして私は、

自分でも気付かないうちに泣いていた。

「あれ．．．どう、してっ．．．ヒッ．．．私、泣いて．．．」

分からない．．．

分からないけど何だか、

とても悲しかった。

まるで、心の中の誰かが、私の代わりに泣いている。

そんな感じだった。

「うう．．．うああああん!!!」

私はベットに蹲って、泣き疲れて眠るまで、泣き続けた。

┆

┆┆

┆┆┆

私が目を覚ましてから丁度、一週間が経った頃・・・

いつものように二人が来て、話している時・・・

ガラッ！！

「ジルッ！！！！！」

突然扉を開けて、

全身傷だらけの青年が入ってきた。

私も驚いたけど、

二人はもつと驚いたふうに、

「おまつ！？ 何でこんな所にいてんだよ！？」

「そうです！！！！ そんな重傷で動いたら体に障ります！！！！」

だけど彼は、二人に声が聞こえないかのように、真っ直ぐに私の元に来てくれた。

（あれ？ 『来てくれた』って、なに？）

私の鼓動は自分でも気付かないうちに、とても速くなっていた。

不安から来るものではなく、もっと別の・・・

そして彼は、

自分の事が分かるか、と聞いて来た。

だけど私は、

「ーゴメンなさい。

貴方は誰ですか？」

そう聞いてしまった。

それを聞いた彼は、

一瞬、酷く悲しそうな顔をして、俯いた。

その顔を見た時、

私は、胸の奥が、張り裂けるほど痛くなった。

そんな彼をフォローする様に、ティナさんが彼の事を説明してくれた。

『斑鳩 誠』

それが彼の名前だった。

そして私は彼に笑って欲しくて、

私は胸の痛みに堪えながら、自己紹介をした。

「ーーよろしくお願ひしますね、斑鳩君！ー！」

私は精一杯の笑顔でそう言った。

そして彼の方を伺うと、
彼は小刻みに震えていた…

「あの、斑鳩君？」

「…ああ、なんだ？」

「…え？」

彼は、泣いていた。

「…どうしたんだよ、皆してこっち見て？」

本人はまるで気付いてない様な感じだ。

いや、きっと気付いていないんだろう…
だから、

「…どうして泣いてるんですか？」

と聞いたら…

彼は、俯いて、

「…ゴメン、な…」

「…え？」

それは、近くに居ないと、聞き取れない程小さな声だった…

「・・・ゴメン・・・」

彼は謝り続ける、

「・・・ゴメンな・・・」

どうして彼が謝っているのか分からない・・・
どうして彼が泣いているのか分からない・・・

だけど・・・

私にはどんな理由があるろうと、

「ねえ、『誠君』」

彼に謝らないで欲しかった。
まるで自分を傷つけている様に見えたから。

「貴方はきつと間違った事なんてしてなはずですよ」

泣かないで欲しかった。

彼の涙を見ていると、悲しくなってしまうから。

「貴方の涙を見ると、私とっても悲しいんです。

だから、『誠君』・・・

お願いだから、笑って下さい」

—————

「・・・だから、『誠君』」

お願いだから、笑って下さい」

「・・・ッ!」

俺は顔を上げジルの顔を見た。

ジルは目を逸らさず、

ジッと俺の目を見ていた。

それは、俺だけが知っている、ジルの強さだった。

（・・・はっ・・・本当に・・・お前には・・・敵わないなあ・・・）

俺は知らず知らずの内に、苦笑いを浮かべた。

・・・だけどこんな笑顔じゃダメなんだろう？

「・・・ああ、ちょっと待ってくれ」

そう言っただけ俺は顔を拭いた。

そして、俺ができる、今一番の顔で。

笑った

「・・・これで良いかな？　ジル」

「・・・はい!」

そしてジルも笑ってくれた。

それだけで、救われた様な気がした。

――

――

――

それから暫くジルやティナやメアリーと話をした後、俺は一人話の輪を抜け、ジルの病室の壁に背を預けながらある考え事をしていた。

「・・・なあ、マッドハッター・・・」

『・・・なんだ？』

壁の向こうからくぐもった声が聞こえる。

「頼みたい事があるんだ・・・」

『・・・言つて見な』

「・・・モリアーティが今、何処にいるか、教えてくれ・・・」

『・・・行つてどうするつもりだ？』

「想像に任せる」

『・・・ククククツ！！！！』

やっぱりお前は最高だなあ！？

さすがは俺の見込んだ男だ！！！！』

壁の向こうから下品な笑い声が聞こえる。

一体俺がどんな事をすると思ってるんだ!?

『アアー笑った笑った!!!』

えーつとあ?

モリアーティの居場所な、

あいつは今、空港に向かつてる見たいだな。

今から向かえば間に合うんじゃないか?』

「・・・そうか」

そして俺はジルの元に近寄って行って

「・・・なあジル・・・」

「あつ?」

どうしたんですか?

斑鳩君?

・・・あれ?

また斑鳩に戻ってる。

まだ記憶が混乱してるのか?

でも今は、そんな事言ってもらえないよな・・・

「・・・実はちょっと急用ができてさ・・・

今から、出かけなきゃいけないなっちゃまったんだ」

「えっ?

そうなんですか!?!」

「ああ．．．もしかすると、ちょっとの間、帰ってこれないかもし
れない．．．」

「え．．．?」

「だけどき、ジル。」

．．．俺、お前に、どうしても伝えたい事があるんだ．．．
だからジル、俺が帰って来るまで、待っていてくれないか?」

「．．．はい。分かりました」

そう言っつてジルは笑ってくれた。

「それじゃあ行つて来るよ」

．．．待っていてくれ．．．
必ず、

お前や、他の大切な人を守るくらい、
強くなつて帰ってくるから．．．

．．．それまで．．．

「．．．行つてらっしゃい。」

．．．ずっと、待ってますよ『誠君』．．．」

．．．そして俺は、空港に向かって歩き始めた。

――

『ザワザワザワッ』

「……………」

「私は空港の構内で、
人々の喧騒を聞きながら、本読んでいた。

いや。

厳密に言えば、『本を開いている』だけで、
中身は全然、頭の中に入って来ない。

「……………」

今の私の頭の中は、
一週間前の、

あの夜の事で埋め尽くされている。

闇の中で、鈍く輝く『赤い瞳』、
圧倒的な力の差、

…人生初の、敗北…

「……………」

…しかし、過ぎた事をいつまでも引きずっている訳にもいかな
い。

(母国に帰ったら、一層鍛錬に励まなくては…)

…そうだ、我々モリアーティ家は、

『あの男』以外に負けてはいけないのだ。

「ーそんな事を考えている間に、
アナウンスが、私の乗る飛行機の離陸時間を告げた。

「．．．行くか」

まだ少し時間に余裕はあるが、他にする事も無い。

そう思い、歩き出した時、

「ー待ってくれ!!!」

そんな声が、人々の喧騒を断ち切って、
空港の中に響き渡った。

――・――

「ハアツハアツ」

「．．．．．」

何とか、間に合った．．．

俺が息を整えている間に、
モリアーティはゆっくり振り返り、俺を見た。

「．．．一体何の用だ？

私を殺しに来たのか？

確かに、今の私なら、赤子の手を捻るより楽にやれるぞ?」

「……………」

「……だが、そう言う訳ではあるまい」

「ああ……………」

そして俺は、

両膝を地面に着き、

額を地面に擦り付けた。

端的に言ってしまうえば、
土下座、だ。

「……………一体なんのマネだ？」

「……………あなたに、頼みがあるんだ……………」

俺は同じ体制のまま、
話し出した。

「……………強く、なりたいんだ……………」

こいつは、

俺からジルを奪おうとした張本人だ。

そんな奴に頼むのは、お門違いかもしれぬ。

だけ……………」

「……………俺はあなた以上に、強い奴を知らないんだ……………」

だから．．．!!!

「――俺をあなたの弟子にしてくれ!!!」

――

「――全く、自分の女を殺そうとした男に、よくそんな事が言える．．．」

よりもよって、

自分を人生で唯一倒した男に、『弟子にしる』と言われるとは．．．

「．．．．．」

「．．．顔をあげる」

そう言つと、

奴はノロノロと顔を上げ、こつちを見た。

「．．．戦兄弟【アミコ】」

「え．．．?」

「――自分より年下の武偵の訓練、及び面倒を見るシステムだ」

私は面倒臭そうに、そう言い捨てた。

「．．．それって．．．」

「良いから、さっさとチケットを買ってこい．．．」

「．．．ああ！！！！」

そして、私の横を走り抜けようとした彼に、

「言うておくが、私は厳しいぞ？

覚悟しておけ」

と言った。

これじゃまるで、出来の悪い少年漫画だ。

なんて思ったが言ってしまったものはしょうが無い。

「承知の上だ！！！！」

そう言っただけで走って行くあの青年の背中を見ていた。

「全く．．．面倒な事になったものだ．．．」

と、誰にも分からない様にため息を吐いた。

第五弾 さようなら（後書き）

今回は訳あって急いで書いたので、
誤字脱字があるかもしれませんが．．．

もし見つけた場合、教えてくだされば光栄です。

再装填 〈The next stage〉(前書き)

プロローグです。

なんか前回、

ジルの寝取られフラグみたいなもんが立っちゃいましたね。

あと、モリアーティ、キャラブレしまくりww

再装填 〈The next stage〉

——少女は、街を見下ろしていた。

巨大な時計台、

通称【ビツク・ベン】

と呼ばれる時計台の、限り無く最上階に近い場所。

そこから見える景色は、まさに絶景だ。

だが少女の目は虚ろで、景色そのものを写して居ない。

——そんな状態が暫く続いた時、

少女はゆっくりと、柵の無い淵まで歩いてゆき、おもむろに両手を
広げ、そのまま……

「—————!!!!!!」

少女は突然、大きな声が聴こえ、慌てて振り向こうとするが、すでに
体は宙を舞っていた。

そしてその直後、飛び降りた筈の少女は、空中で抱き留められた。

そして少女は、涙を零しながら、抱き留めた本人に、

「……どうして……来たんですか……?」
来ないでって……あんなに言ったじゃないですか……?」

そう言う少女の目は、涙に濡れていた。

しかし、口元は幸せそうに、笑っていたー

再装填 〈The next stage〉 (後書き)

今回はこんだけ。

次回からロンドン編に入ります。

この小説をお読み下さる、全ての皆様、
どうか、長い目でお付き合い下さい。

第一弾 『暴君』(前書き)

みんなキャラブレ〇(^(^)(

第一弾 『暴君』

「ーあれから数ヶ月後、

とある廃倉庫で、

マフィア同士の麻薬取引が行われていた。

「ー悪いな、今回はこれだけだ」

「ー立ったこれだけだと!？」

ふざけるよ、コッチがどれだけリスクを犯して来てるか分かってんのか!？」

「それを言うならお互い様だろう？」

「こっちだって命懸けなんだぜ？」

「くそつ!!」

「これも全て、あいつが現れたせいだ!!!」

「『暴君』か・・・」

そう、彼等は何も『商品』をケチっている訳では無いのだ。

ただ、大きな取引をすると、

『暴君』に見つかる確率が高くなる。

彼等の言う『暴君』とは、

ここ数ヶ月の間に突如現れた武偵の通称である。

その『暴君』は、
現れるや否やありとあらゆる犯罪を検挙し始めた。

その犯罪は、万引きからテロリストまで、
とにかく無節操に狩りまくった。

マフィアやディーラーはそれを恐れて、大きな取引を避けるようになっ
ていた。

「それにしても、何者なんだ!!!」

あの『暴君』って男は!？」

「分からん……」

だが今はそんな事より、取引をさっさと済ませるほうが賢明だろう
?」

「そ、それもそうだな……」

「——悪いが、そう言う訳にわからないんだよ」

そんな声が、

頭上から聴こえたと同時に——

バツコーン!!!!!!

突如、倉庫の天井を破り、一人の青年が飛び降りて来た。

「ッ!? 誰だてめえ!!!!!!」

「——俺か?」

そして、

倉庫の暗闇の中で、

――ゆらり

と、赤い瞳が輝いた。

「俺があんたらの言う所の『暴君』だよ」

そう言つて、懐から一本のナイフを取り出し、
およそ二十人近くのマフィアに斬りかかった。

――

――

――

「ああ――」

俺は、廃倉庫の割れた天井から空を見ていた。

俺がブチのめしたマフィアの上に腰掛けながら……

『――ファンファンファン……!!!!』

「よーやくおでましか……」

外で大量のパトカーのサイレンが聞こえる。

「ほれ、お迎えが来たぞー」

げしっ！！！！

「うう．．．」

俺がマフィア連中を起こしていると、
ちょうど警察が入り口の鍵を破り、突入して来た。

「散会しろ！！」

徹底的に、捜すん、だ？」

そう言つて真つ先に突入して来た警官が、
俺の顔を見て動きを止めた。

「どーも警部。

ご無沙汰してます」

「斑鳩君じゃ無いか！？

君がここにいると言つ事は、つまり．．．」

「ええまあ、

向こうで全員寝てますよ。

後はそつちの方でよろしくお願いします。

今から帰らないといけないので．．．」

実はこれ、半分ウソで半分本当なんだよな

このおっさんに絡まれると長いんだよ．．．

「ははは！！！！」

そうかそうか、それは悪かった。

君がこっちに来てからは我々の仕事もずいぶん楽になったよ。
おいその君!!
彼を通してあげなさい」

『かしこまりました!!!』

「んじゃ、お疲れ様です」

ふう、なんとか切り抜けたか・・・

『ブー!!!ブー!!!』

「うおう!?!」

いきなり電話がなった!!!!!!

(・・・えーっと。着信は・・・)

あ、モリアーティだ。

ピッ!!--

「はいもしもし?」

『ーかたずいたか?』

「もち」

つーかこんな連中に手こずるかよ・・・

『よし、じゃあ迎えを送る』

「良いよ。大した距離じゃねーし、電車使って帰る」

『ーそうか。』

『そう言えば誠。』

お前、十二歳くらいの眼鏡かけた少年を見てないか？』

「・・・抽象的過ぎだろ・・・」

そんなもん見てたって覚えてねーよ」

俺は倉庫からのんびり抜け出して、
駅に向かって歩き始める。

『ーそうか、』

もしも見つけたら一応連絡してくれ』

「へいへい・・・」

・・・見つかるか！！

倉庫から出て、街に差し掛かった辺りで周りを見渡すと、

（ああー。もうこんな季節か・・・）

街は一面、クリスマス一色に染められていた。

んで、駅が見えて来た。

「んじゃ、地下鉄入るからもう切るぞ？」

『ああ』

プッ

ツーツー

改札を抜けて、

駅のホームで次の電車を待つ。

時間は割と遅いので、

人は人っ子一人居ない。

丨

丨丨

丨丨丨

十分後！！

プシューッ！！！！

「やっと着いたか・・・」

さっさと電車に乗り込む。

電車内はなんと、

クリスマス仕様にコーディネートされていた！！！！

「・・・・・・・・・・」

荷物置きには、

小腸や大腸のリース。

壁一面は真っ赤に染められている辺りは、
クリスマスっぽくて良い感じだなあ・・・

ただ、周りが小便や糞の匂いに包まれているのはマイナス。

そして真ん中に立っている真っ赤な少女は、
さしずめサンタクロースかな？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その少女は、
俺の存在に気付いて居ないように、
ぼーっとしている。

・・・・・・・・えーっと、
俺にどーしろと？

「・・・・・・・・これ、君がやったの？」

「・・・・・・・・え？」

そこで初めて俺の存在、つーか周りの惨状に気付いたようだ。

おせえ・・・・・・・・

「・・・・・・・・え、ウソ・・・・・・・・これ、私が・・・・・・・・？」

あれ？

日本語だ。

て、ことは日本人？

「えーつと．．．

もう一度聞くけど、君がやったの？

「これ」

「ーヒッ！！」

露骨に驚かれた。

むしろ俺の方がびっくりだよ。

「ち、ちが！！」

これは、私じゃ無くて．．．でも．．．

ああでも、もしかしたら本当に．．．！！！！！！」

ヤバイな．．．

パニックってる。

当たり前っちゃ当たり前なんだけど。

やっぱりおせえ．．．

「ああはいはい。

とにかく落ち着いて．．．?」

無理か。

「ヒッ!？」

来ないでくださいッ!!!!!」

そう言つて、
手に持った包丁を俺に突きつけて来た。

(うつわぁ・・・あの包丁真っ赤じゃん・・・)

(あれは【クロ】だろ。
間違いなく)

とりあえず少女を制圧しようとして一歩近づいた所でー

プシューッ

「あ?」

気づかない内に、次の駅に着居ていたみたいだ。

「ーッ」

扉が開くと同時に、
包丁を持って突進して来た。

「うおっ!?!」

ドンッ!!--!

そのまま俺を突き飛ばし、外に飛び出して行った。

「ーあ、ちょ・・・」

あーあ・・・

逃げちゃったよ・・・

プシューッ

ガタン！！

扉が閉まり、

電車が進み出す。

「・・・これって俺が通報しなきゃなんねーの・・・？」

俺は血まみれの車内を見渡して、

陰鬱な気分になった。

↓

↓

↓

さて、

ここで俺がこの数ヶ月、一体何をしていたか一応説明しておこう。

と言っても、特別な事はそれ程して居ないんだけど・・・

基本的には、モリアーティと組手したり、

依頼の手伝いだったり、だいたいはそんな感じ。

あと、一つだけ普通じゃ無い事もしていた訳だ。

『魔眼の発動』

俺の数ヶ月は、むしろ殆どこれに費やしたと言っても良いだろう。

俺自身、自分に『魔眼』何て物があるなんて知らなかったし、
そもそも一体どんな力なのか、検討もつかなかった訳だが、
鍛錬を繰り返す内に、
およその能力が判明した。

その能力は視覚を媒介に発動する物ではなく、
『脳内のリミッターを一時的に外す物』
だった。

最近では鍛錬の甲斐あって、一日十分間だけ使用できるようになっ
たが、今だに練習中。

（今日の依頼もその一環）

さて、それじゃあ本編に戻ろうか？

――

――

――

なーんて、

ちよつと感傷的に昔の事を振り返りながら街を歩いていると。

（駅から出た時は通報しなかった。面倒臭かったから）

「――嫌だ!!」

離してください!!!」

「ん？」

何かトラブル臭がする・・・

あっちの方だ。

細い路地裏を進んでいくと、一人の少年に複数の男が絡んでいた。

「――良いから来いって言ってんだろっが!!!」

男の一人が拳を振り上げた!!

「ヒッ!?!」

「――ストップ」

ガシッ!!

「・・・え?」

「ナッ!?!」

俺は即座に男たちに間に入って、少年を庇った。

「てめえ・・・こいつの連れか!?!」

だったら、二人まとめてぶっ殺してやんよ!!」

言うなり男達は、

俺たちに向かって殴りかかって来た。

ああーめんどくさ。

(えっと、今日の分はまだ二分くらい余ってたよな)

「あ、危ない！！！」

その声が聴こえた時には、拳が俺の目の前にあった。

そしてその拳が、

俺に当たる直前、

赤い瞳が煌めいた。

第二弾 少女との出逢い（前書き）

久しぶり書いたので誤字脱字があったり無かったりするかと思ひますが。

生温かい目で見守って頂ければ幸いです。

（ ・ ・ ・ ）

第二弾 少女との出逢い

「私と斑鳩は、ロンドンの街を歩き回りながら、仕事の話をして
いた。」

「……これが今回の依頼だ」

そうやって私は、斑鳩に仕事の内容が書かれた資料を渡した。

「……了解」

斑鳩は適当に目を通し、懐にしまった。

「んじゃ、行って来る」

そして、ゆっくりとした足取りで街並みに消えて行った…

――

――

――

ガヤガヤガヤガヤ…

私は斑鳩と別れた後、

特に当てや目的がある訳でも無いので、街をぶらぶらしていた。

「……ねえねえ！！ そのお兄さん！！！！」

何か後ろから聴こえた様な気がしたが、

きつと気のせいだろう。

「――」

「無視すんなあああ!!!!」

「うるさいな・・・」

誰だ・・・

こんな所に私の知り合いなんて居ないぞ。

そうして振り返った私の目の前に、

上はタンクトップにボロボロのコート、

下はホットパンツと言う、

あまりに季節外れな格好の少女がいた。

「・・・ぶえつくしゅん!!!!」

やはり寒そうだ・・・

「・・・それで、私に何の用だ？」

「あ、そうでした!!」

と言っても大した用では無いんですよ!？」

・・・大した用でも無いのに呼び止めるな、と言いたいがここは我慢だ。

「・・・だから何だ」

「お金下さい」

「断る」

「そ、そう言わずに!？」

この身寄りの無い純真無垢で穢れがなくて貧しい美少女にどうかお
恵みをおおお」

自分で美少女とか言うな。

とか思っている間に私の服を掴んで激しく揺すり出した。

『ガクガクガクガクッ』

「な、にお、するッ!!!」

「かーねーかーねーかーねー!!!!!」

．．．このガキ．．．

「わ、わか、ったから、離せ!!!」

「ほ、本当ですか!？」

パッ!!!

．．．離してはくれたが、
襟が凄まじく乱れたぞ。

「いくら渡せばいい．．．?」

「有り金全部渡しな！！！」

「．．．おまわりさん」

「イヤだなあ冗談ですよ旦那あ」

「．．．．．」

「．．．めんどくさいぞ、この女。

「このまま絡むと後で痛い目に会う気がする。
さっさと金を渡して追い払うか。」

「ちょっと待ってる．．．」

「りょーかいッス！！！」

「さて、財布は．．．
ん？」

「．．．．．」

「あれどうしたんですか？

「早くお金下さいよあ」

「．．．．．財布が無い」

「．．．．．はあ！？」

「．．．そうだ、何処を探しても財布が無い。」

何処かで落としたか、
それか．．．盗まれた？

「．．．．．」

「ハッ！！ 金無し貧乏人なんかにはねーです！！
さっさと失せやがれ！！！」

《シツシツ》（追い払うジェスチャー）

「．．．．．」

殺すか．．．？
本気で。

「それじゃあ貧乏人さん。
精々、頑張って下さい！！！」

《ピューーーーーん！！！！》

そう言っつて瞬く間に走り去って行った．．．

逃げ足早いな。

「．．．さて」

そして俺は懐から、『財布』を取り出した。
勿論私の物では無いが。

「．．．ふむ」

財布の中には数枚の紙幣と身分証が一枚入っていた。

「何だ、そこそこ持っているじゃ無いか」

私が今持っている財布は当然、先ほどの彼女の物だ。

私の財布を『盗んだ』のは間違いなく彼女だろう。

だから私は別れ際に彼女の懐から財布を『拝借』させて貰った。

そして私は、身分証に書かれて居る住所に向かって歩き出した。

「・・・待っている、

『マリア・ローズ』とやら

それにしても、

嘘みたくにありきたりな名前だな・・・

本名と言うわけでは無いと思うが、

それにしても捻りがなさすぎる・・・

――

――

――

――・――

「？」

いや――

今日は大漁だあ？

「にひひひ．．．」

内ポケットに入った大量の財布！！！！

札幌の山！！！！

これが笑わずに居られるかッ！！！！

「特にあのキザなにーちゃんの財布は別格だったな．．．」

そう、

懐にはたくさん財布があるが、

その中で一つだけ異彩を放つこの財布．．．

立った一つで、

他の財布に入っている紙幣をかき集めても足りない程の大金と、真つ黒なカードが入っていた。

「さつきから気になってたんだけど．．．なんだろうこのカード。パツと見はキャッシュカード見たいんだけど、黒なんて見た事無いし．．．」

．．．ま、いつか！！

お金は一杯あるんだし！！！！

「うーん、それにしても．．．」

（あの兄ちゃんかつこ良かったなあ．．．
連絡先とか聞いときゃ良かった。

あれ？

でも電話したら居場所バレるじゃん！？）

（30分後）

そんな事をモンモンと考えている間に家に着いちゃった・・・

「はあ・・・もういつか。

諦めよ・・・こんな事考えててもしょうがないしねー」

《ガチャ》

「・・・あれ？」

鍵があいてる？

確かに掛けて行ったんだけど・・・

（――まさかっ!?!?）

イヤな予感を振り切って部屋の中に駆け込んだ!!!

「――ッ!!!!!!」

家の中はひどい有様だった。

家具と言う家具が倒され、食器などもほぼ一枚残らず割られていた。

そんな部屋の中央で、一人の男が立っていた。

その男がゆっくり振り向いた。

「――やあ、おかえり」

――――

「やあ、おかえり」

「ーーーーッ!!!!!!」

私がそう言った瞬間、

少女がすごい勢いで掴みかかって来た。

そしてそのまま胸ぐらを掴んで来た。

「お前が．．お前がやったのか!!!!!!」

ユーリを何処にやった!!!!!!答える!!!!!!」

「ーー誰の事だか分からんが．．

この家の状態は私のせいでは無いぞ。

私が来た時には既にこの状態だったぞ」

少し言い訳じみて聞こえるが事実だ。

私は、とりあえず財布を返して欲しくて来ただけで、ここまでする意味が無い。

その折をとりあえず説明して、冷静になる様に嗜める。

「ーー財布? って、あ!?!」

「思い出したか?」

「あのイケメンの兄ちゃん!!!!!!」

「・・・イケメン？」

「ああ違う違うこっちの話!!!!!!
じゃ無かった、あっちの話だ!!!!!!」

「どっちの話でも構わんが、
さっさとこの手を離してくれないか・・・？」

「ああスイマセンスイマセン!!!!!!」

「————」

「・・・・・・また襟が乱れた。

「・・・あのう？」

襟を直している時に、

彼女がおおずとお話しかけて来た。

「・・・ちよつと待て。ここを、こづして・・・良し。
それで、どうした？」

「あ、はい・・・」

もしかして私を警察に突き出したりしますか？しますよね？」

「いや」

「ほらやつぱりだ!!!!!!」

そこを何とか!!!!!!私にできる事なら何でもしますだから見逃して下さい!!!!!!」

「――人の話を聞け」

「お願いしますお願いします!!!」

警察に通報するにしてもせめて弟を助けてからにして下さい!!!
弟を．．．ユーリを残して捕まる訳には行かないんです!!!」

「――弟を助ける？」

「――はい、そうなんです．．．」

実はユーリは今、マフィアに追われているんです．．．」

「．．．．．．．．．」

目を見るに、どうやらふざけている訳では無い様だが．．．
だとしたら、ずいぶんと物騒な話だな．．．

「．．．弟が追われる理由はわかってしているのか？」

「．．．それは、分かっていますけど、どうしてそんな事を聞くんですか．．．？」

「ふむ、言っただけ居なかつたが、私はこう見えても武偵だからな。
報酬次第ではどんな仕事でも請け負う」

「ほッホントですか!？」

あ、でも．．．」

一瞬期待の色を乗せた顔がすぐさま曇る。

「．．．大体お幾らくらい掛かるんですか？」

「ふむ．．．金か。」

まあ内容次第だが応相談と言った所だな。

だが、話すのはタダだ、話すだけ話して見たらどうだ？」

そう促すと、

少し躊躇ったあとに、

訥々と語り出した。

「ーー実は私、弟がいるんです．．．」

「それは知ってる」

「な、なんですつてえ！！！！？？？？」

ああああ貴方もしかして私のストーリーカーですか！？

いやー助けてーおまわりさーん！！！！！」

「．．．．．．．．．」

「ーこいつは．．．」

殺しても良いのか？

「ーさっき自分で言っただろうが．．．」

あと、そのお巡りさんが来てー一番困るのはお前じゃ無いのか．．．
？」

クールになれ。

クールになるんだ。

ここでキレたら相手の思う壺だ．．．

抑える。

良し深呼吸だ・・・

(すーはーすーはー)

・・・よし落ち着いた。

「ハッ!!! 甘いですね!!!」

貴方は既に不法侵入と言う大罪を犯して居るのですよ!!!!!!」
(ドヤ顔)

《プちん》

「ーそうだな。

だったらついでに、人殺しと言う大罪もついでに犯すか・・・」

腰から剣を引き抜く。

「・・・あはははは!!!!!!」

やだなあ誰を殺すって、言うんです・・・か・・・?」

「ーーー」(ニッ「リ」)

「ごめんなさい本気すいません調子に乗ってごめんなさい土下座して靴をなめて三回回ってワンと泣くので許して下さいお願いしますこの通り!!!!!!」

物凄い勢いで土下座した。

《ゴンッ》

《グサ！！！》

「ぎゃー！！！！！！！！！！
わわわ割れた食器が額に刺さった！？
血がああああ！！！！」

《ボタン》

「・・・おい、大丈夫か？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ー返事が無い。
ただの屍の様だ。」

Midnight escape (前書き)

今回、誠のキャラを修正した為、「誰だよ？」みたいになるかもし
れません。

ゴメンなさい。

投稿に時間が掛かり、
ゴメンなさい。

後これは、勝手な希望なので無視して頂いても構いませんが、かん
そーとか書いてくれると嬉しーかなー．．．なんて、ゴメンなさい
．
．

Midnight escape

「――」

俺は自ら叩きのめしたチンピラを見下ろしながら、一息ついていた時、

「あ、あの――！」

「……ん？」

「あ、ありがとうございます――！　その……僕、今これだけしか持っていませんけど……」

そう言っただけ少年は、ポケットからなげなしの小銭と、心ばかりの紙幣を俺に突き出してきた。

「ああ、良いよ別に。俺が好きでやったことだし」

少年は一瞬理解できない様な顔をし、その後「うわぁ」と声を出した。

「……カッコいい……」

「ん？」

「あんなに強くて、それでいて優しいなんて……」

「いやいやいや――！！！！　そんな大した者じゃ無いよ……」

「・・・ぼくも、お兄さんみたいに強くなりたいなあ・・・そしたら、姉さんを少しくらい楽しませてあげられるのに・・・」

「・・・そうか」

「・・・あの!?!?!?!」

「ん、どうした?」

「ぼ、ぼくを弟子にして下さい!?!?!?!」

「はあ!?!?」

「ぼくも、お兄さん見たいに強くなりたいんです!?!?!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・いや」

ああ、今の俺は酷い顔をしているんだろうな・・・

「・・・俺は、強くなんてないよ・・・」

俺は、大切な人を護れなかった・・・

・・・今でも、たまに『あの時』の夢を見る。

ジルを助けることの出来なかった時の夢を・・・
父さんを失った時の夢を・・・

「・・・そうだな、もしも強くなるって言うならー」

「はいつー!!」

「ー俺なんかより、もっと強くなってくれ」

「．．．え？」

「俺が救えなかったものを、救えるくらい．．．」

「あ．．．」

そうして二人で黙り込んだ時．．．

《ブツブツ》

「．．．誰だ、モリアーティか？」

携帯の液晶画面を確認してみると、意外な人物だった。

「あ、悪い。電話出て良いか？」

「え、ええッ!?!?!どうぞどうぞ!?!?!」

《ピッ》

「．．．もしもし？」

『わ、あ、えと、こ、こんな夜分遅くにお電話してしまい、申し訳
ございません!?!?! あ、えと、お時間大丈夫ですか!?!?』

「ああ、大丈夫だから落ち着けメアリー」

どうだ、驚いたか!!
ジルの友人のメアリーだ!!

初めて登場した時に殆ど説明していなかったから、取り敢えず紹介。

メアリー・ホワイト

同い年で、髪型はブロンドのストレート。

まあ、簡単に説明するとお嬢様みたいな奴だ。

性格は面倒見の良い、要するに『お姉さん』みたいな性格だ。

以上、説明終わり。

「それで、どうしたんだ?

メアリーの方から電話して来るなんて・・・」

『・・・ご迷惑でしたか・・・?』

「いや、まさか。

久し振りに声が聞けて嬉しいよ」

『本当ですか!?! .. .よかったあ .. .』

「で、何か用か?」

『いえ、これと言って用事は無いんですが .. .』

「しいて言うなら、誠さんが居なくなつて随分経ちましたので、少し
気になつて .. .」

「ああ、元気なら有り余つてるよ。

それより、ジ .. . そっちの皆はどうだ?

「元気にしてるか?」

『．．．そんなに無理をしなくても大丈夫ですよ。ジルさんの事が気になるんですね．．．』

「．．．ああ．．．」

『．．．ジルさんの記憶は以前戻っていませんが、傷の方は治ったので、今では普通に授業も受けています。依頼の方も、私達が手伝ってですが、少しずつこなしています。このまま行けば単位も問題無いと思います．．．』

「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

．．．何故だろう？

ジルの話を始めてから、メアリーの声が少し沈んで音量が小さくなったような気がする．．．

だからかもしれない．．．

《．．．チリーン．．．》

と、背後からかすかに鈴の音が聴こえ、それと同時に微かに殺気を感じた。

「ッ！！！！！」

とっさに少年を抱きかかえ、路地から飛び出す！！

《ガガガガッ》

振り向くと、俺達のいた場所に数本のクナイが刺さって居た。

『誠さん！？ どうなさったんですか！？』

「悪いメアリー。客が来たようだ。後で掛け直す」

『誠さん！？ 誠さー！』

《プツツ》

携帯を一方的に切り、
クナイの飛んで来た方を睨む。

「ほう、今のを避けるか．．．？」

クナイの飛んできた先からそんな声が聞こえて来た。

「．．．．．誰だ」

「え、ええ！？」

少年を後ろに庇いながら、態勢を立て直す。

すると通路の奥から、黒装束に身を包み、顔の半分を覆面で覆った
女が現れた。

「．．．人に名を尋ねるには、まず自分からでは無いか？」

「．．．斑鳩 誠だ」

「ほう、お前が最近噂の『暴君』か．．．」

「な、なんだその目は！？
ええい、もう良い！！！」

《チャキン！！ ガガガッ》

再び足元にクナイが刺さる。

「大人しく後ろの少年を渡せ！！！！ さもなくば……」

「……どうするんだ？」

「――殺しはしないが、腕の一本くらい覚悟して貰うぞ！！！！！！」

《シュイーン……》

彩女と名乗った少女は、流れるような動きで腰に差した脇差を引き抜き、即座に俺達の方に肉迫する！！

「ツチ……」

俺も懐からナイフを取り出し、応戦する――！！

「――疾！！」

横薙ぎを下から弾き、
跳ね上がった刀が、今度は縦に振り下ろされる。

それを紙一重で躲し、カウンター気味にナイフを繰り出す！！！！

「ーッ!？」

振り下ろされ、身動きが取れない筈の刀が、突如跳ね上がって来た
!!

「つく．．．」

即座に距離を取り、間合いの外に出る。

こいつ．．．結構やるな．．．

．．．だとするとマズいな．．．

今の俺は、今日の分の魔眼を使い切っていて、本調子じゃない．．．

それに．．．

「ー隙ありっ!!!」

その声と同時に、三本のクナイを投擲。

俺の背後を抜け、少年の元に殺到する!!!

「ッ!？　クソッ!！」

再び懐に手を入れ、ニューナンブM60を引き抜き、クナイを撃ち
落とす!!!

《チャッ!!!　　ダダダン!!!》

「うわっわっわ!？」

《カキキキン！！！》

「ーどうやら、この女もさっきのゴロツキと同じ様に、後ろの少年を狙っているようだ。」

「……………」

「……………」
「……一対一ならまだどうにか出来るが、この少年を守りながらとなると……………」

「少し厳しいか……………」

「フフフ、どうだ！！」

諦める気になつたか！！！！」

「ーいや？」

《カシャン、カランカランカラン…………》

撃つた銃弾の空薬莖を抜き…………

《…………チツチツチ…………カシン！！！！》

三発の銃弾を込める。

一発目は閃光弾。

二発目は発砲と同時に爆発的な音を発する弾。

三発目は普通の弾丸。

女の方を確認しつつ、背後の少年にだけ聞こえる音量で話しかける。

「（少年・・・）」

「（は、はいッ！..!）」

「（俺が合図したら、目と耳を塞げ）」

「何をこそこそ話している!..?」

「おっと」

再び繰り出される剣戟をナイフで応戦しつつ、隙を伺う・・・

《キン、キキキキン、キキン!..!》

「ッ!..!」

「..ここだ!..!」

「今だっ!..!」

「ハイッ!..!」

「しまっ!..!..?」

《ガウンッ!..!》

銃声と同時に眩い光が街頭埋め尽くす!..!..!

《!..!..!..!..!..!》

二発目の銃声は名状し難い程の爆音を発する!..!

そして俺は、少年を抱きかかえ一目散に走り出した。

「――ま、待て!?!」

はっ!! 待てって言われて待つ奴がいるかよ!!!!

――

――

――

〈十分後〉

《タッタッタッタッタ》

「あ、あの!! もうここまで来たらもう大丈夫なんじゃ . . .
!?!」

「. . .いや、さっきから徐々に追い付いて来てるな . . . 120
m位の距離に居る . . .」

. . .さて、そろそろ次の手を打つか . . .

走りながらポケットから携帯を取り出し、短縮ダイヤルから『アイ
ッ』を呼び出す。

《プルル、プルル》

『 . . . どうした、誠』

「ああモリアーティ、早速で悪いが、俺が今から言う住所にへりを
よこしてくれ!?!」

『――何かあったのか？』

「ああ！！！！」

それじゃあ今から言う住所の屋上にへりを頼む

！！！！」

！

！！

！！！！

『・・・正気か？　　その建物の屋上は、へりが着地できるスペースなんて無いぞ？』

「良いんだ。ただ、時間通りにそこを横切るだけで良い！！！！」

『・・・全く、今日は面倒な一日だ・・・分かった、手配しよう』

「頼む・・・」

《ピッ》

「だ、誰に電話したんですか！？」

「・・・仲間、かな」

そつだ、今の俺にとって、唯一の・・・

「・・・どうやら向こうも、本腰をいれて来た見たいだな・・・」

背後の気配が少しずつ大きくなって来た。
恐らく100mに切った辺りだろう。

さて．．．

「それじゃあ付き合ってもらいますか、俺達の、Midnight
escapeに．．．」

――――

《シュタタタタタ．．．》

月の照らす街に、私の風を着る音が静かに響く．．．

私は自分の前方、およそ120m程先の距離に居る男の後ろ姿を睨みつけた。

（くっそーあいつ、閃光弾何て使いやがってえ．．．）

何だよ、あいつ!?

もう、男の子を攫うだけの簡単な仕事だって言われたから受けたのに．．．

あんな奴が居る何て聞いて無いよ（泣）

ううう．．．まだ目がチカチカする．．．

「――もう怒った!!! 絶対捕まえてやるッ!!!」

そして私は、走る速さをあげた。

――

あ、そうだ、大事な事を忘れてた。

「ねえ君、名前教えて貰って良いかな？ さっきから『少年』
って呼ぶの何かメンド臭くてさ」

「うええええ！？ それって今聞くことなんですか！？」

「ああそうだ、割と大事なことだ」

そう言っただけは方向転換し、30m先の二階建ての飲食店に向かって走り出した。

「うわわわ？ 僕の、名前は、ユーリ、です！――！」

「OKユーリ、それじゃ俺の首にしっかりと捕まってる。離したら死ぬと思ってくれて構わないぜ？」

「ひい！？」《ガシイ――！》

「後それと、先に謝っとくわ、ゴメンね――！」

目前にまで迫った飲食店。

俺は魔眼を『無理矢理』発動し、身体能力を限界まで引き上げ、そして……

――俺は少年を抱えたまま、飲食店の屋根に飛び乗った。

それじゃあ、もういちよおお．．．！！！！俺は隣接した五階建ての
アパートの屋上までジャンプした。

「もうやめてえええええ！！！！！！！！！！」

――

――

――

そんな追いかけてっことを続け、気が付くと階層は十五階まで上がり、
目的地に到着していた。

流石にここまで来ると周りに建物は無い。

だが、この建物は設計の都合で、屋上の活動スペースが極端に狭い。
まあ、畳十二畳分くらいだ。

――その屋上から、景色を見下ろしたあと．．．

「へえ．．．結構頑張るんだな．．．」

チラッと後ろを確認すると、彩女がいた。

「ゼー、ゼー、ゼー、まーてー．．．」

「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．」

何か．．．大分限界っぽいな．．．

と、その時．．．

《ズクンッ》

「ッ！！　ぐ、あああああああ！！！！！！」

「！？　ど、どうしたんですか！？」

《ズクン、ズクン》

「ぐ、あ、あああ．．．だ、大丈夫だ．．．」

「ほ、本当ですか．．．？」

「ああ．．．」

「ただ、こっちもそろそろ限界だな．．．」

「魔眼が使用時間が制限時間を大幅にオーバーしたため、脳が悲鳴をあげている。」

「持ってあと五分くらいか．．．」

「．．．五分もあれば、十分だ．．．」

「そうして時間を確認しようとする、遠くの方からへりの音がきこえてきた。」

「．．．時間が．．．」

「ふ、フハハハ．．．追い詰めたぞ．．．ていうかもう逃げないで

（泣）

その後、強烈なGが襲いかかり、必死に片手でユーリを、もう片方で梯子を掴む！！！！

ものすごい速さで離れて行く建物の屋上に、
彩女が呆然と立ち尽くしていたのが見えた・・・

Midnight escape) 後書き

何かと色々ごめんなさい . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5051w/>

真紅の魔眼と漆黒の剣

2011年12月12日00時50分発行